

P-019

当院における安全点検システムMARISの運用方法

石巻赤十字病院 臨床工学技術課

○^{ささき げんき}佐々木元氣、高桑 雄也、神野 智実、栗原 広兼、下田 真秀、五ノ井良和、片山 弓子、久保田浩光、佐藤 貴史、熊谷 一治

【はじめに】当院では2006年の病院移転時より医療機器の中央管理を開始し、安全点検システムMARIS(以下MARIS)を導入した。2014年にはMARISを更新し、導入時より使用しているPDA端末2台に加えタブレット端末を4台増設した。

【運用方法】医療機器の貸出・返却、点検記録管理、故障・修理記録管理、医療機器の稼働率の把握を行っている。医療安全対策として終業点検をMARISへ登録することで未点検機器の貸出をできないようにしている。また、タブレット端末を増設し病棟業務2台、手術室業務1台、内視鏡業務で1台使用することで、今まで点検用紙で行っていた医療機器の始業点検、使用中点検を直接MARISに入力できるようになった。

【まとめ】MARISの導入により医療機器管理の簡便化と、容易に医療機器の稼働率を算出することができ医療機器の適正購入に役立っている。またタブレット端末を導入したことで点検記録の電子化を可能にした。さらに今後は、故障修理の情報を活用し適切な時期に予防保全を行うことでより安全な医療機器を患者に提供していきたい。

P-021

看護研究研修内容への「批判的思考」の導入

さいたま赤十字病院 看護部

○^{おの のら すみ}小野寺 澄、古厩 智美、伊藤 久美、細田 智美

【目的】看護研究の研修内容に批判的思考の集合研修を導入したことが、どのような教育支援になったのかを質問紙の記載内容から明らかにする。

【方法】論文を批判的に読む視点を学ぶことを研修目的として、平成27年8月25日看護研究研修生53名に対し3時間の集合研修を実施した。研修終了後に7項目からなる独自の質問紙を配布し、得られたデータを単純集計し記述統計で分析した。倫理的配慮として、質問紙の記載は個人の自由意思であること、記載内容はデータ化して院外発表することを説明し、質問紙の提出をもって同意とした。

【結果・考察】回収数52、回収率98.1%であった。批判的に論文を読む学習経験の問では、既習14人(26.9%)、未習30名(57.7%)の結果が得られた。また、批判的思考の重要性の理解では、大いに理解できた24名(46.2%)、まあまあ理解できた28名(53.8%)と、52名全員が理解できたと回答した。興味深かった点の自由記載では、客観的かつ批判的に読むことで文献内容の不一致さや欠損部分に気づくことができた、自分の研究への応用を考えた、批判の意味合いが変わった等の回答が得られた。看護研究の研修内容に批判的思考を導入している研究論文や報告は見当たらず、他施設での取り組みは把握できなかった。論文を批判的に読むことはレベルの高い知的作業であり、半日で会得することは困難である。しかし、文献レビューを行う研修生には不可欠な教育支援であると考えた。今回、研修内容に批判的思考を導入したことは、論文を批判的に読むことの重要性を研修生に理解させ、新たな気づきや発見をもたらしたと考える。

【結論】看護研究への批判的思考の導入は、研修生全員に批判的思考の重要性を理解させ、研究活動に新たな視点をもたらす教育支援となった。

P-023

EPA看護師に対する手術室教育の一例

浜松赤十字病院 手術室

○^{のぐち あきよ}野口 晃代、佐藤 徳子

看護師免許取得後2年目の経済連携協定看護師(以下EPA看護師)が、当院手術室に配属された。従来の新人教育に加え、言葉の壁や文化の違いにより指導内容の変更や方法に工夫を持たせる必要があった。教育にあたり、当院手術室未経験者用OJTを使用し指導を行うこととし、EPA看護師の言葉の壁や進捗度に合わせて、OJT実施内容を変更し対応した事例について報告する。当院の手術室未経験者用OJT(以下手術室OJT)は達成期間を設けず、個人の達成度に合わせて新人指導を行い、評価をしている。今回EPA看護師に対し手術室OJTを使用し指導することとなった。手術室の環境や使用する薬剤が多いこと、未知の業務内容に対する不安があった。また医師やスタッフに対し、言葉が理解できないことによるコミュニケーションへの不安や、それに対し怖い、という発言が多く聞かれた。本人とどうしたらそれが解消されるかを話し合い、対策を行った。マニュアルや言葉のみでの説明では十分に理解ができないこともあり、繰り返し同じ言葉で同じ内容を具体的に説明することで徐々に理解でき、業務を確実に実施することができた。行動指示1つに対しての言い回しが多くあり、行動できるのにわからない表現で指示されると理解できないというジレンマも感じていた。そのため手術室リーダー会で、OJT進捗度毎に本人の思いや目標、現在何が問題となっているかを伝え、全スタッフで統一した言葉づかい、対応ができるようにした。OJTに沿って指導を行ったが、安全で正しい行動を理解してもらいたいという思いからの指導方法と、その指導方法が受け入れられないというお互いの思いの違いもあり、実際に指導が行えない時期もあった。本人が自信を持って何ができるか、何ができないかを明確にすることで安全な医療・看護の提供が行え、積極的な行動が見られるようになった。

P-020

初療室クリニカルラダーの作成と活用

名古屋第一赤十字病院 看護部

○^{あまじ あやこ}朝日 綾子、近森 清美

【目的】初療室看護師は、専門的な技術を習得し、経験知による学習が熟達には不可欠である。そのため、セミナーや勉強会に参加し救急領域における看護実践能力の向上を図っている。しかし、赤十字医療施設のキャリア開発ラダーでは、救急領域の看護実践能力が評価されにくい。そこで、救急領域における段階別の学習や経験の場を意図的に計画できるような支援し、救急領域における看護実践能力の評価をするため、初療室独自のクリニカルラダーを作成したので報告する。

【方法】初療室独自のクリニカルラダーの作成後、アンケート調査を実施した。

【成績】日本救急看護学会の「救急看護クリニカルラダー」を基に初療室独自のクリニカルラダーを作成した。初療室看護師に初療室クリニカルラダーを基にし、期待される看護師像や段階別にに応じた研修会への参加計画を提示した。その後、初療室看護師20名にアンケート調査した結果、「自分の初療室看護師としての今のレベルがどれくらいで、今後どのような研修に参加すればよいのか分かった」、「救急領域でのキャリアアップを図る上で目標や具体的な行動計画を立案する際、参考になる」など95%以上の肯定的な回答が得られた。【結論】初療室クリニカルラダーを作成し、段階別の初療室看護師としての評価基準や今後の学習計画が可視化できた。また、看護管理者として、人材育成の観点から初療室看護師を段階別に支援することにも有用と考える。今後は、活用期間が短いため、継続して初療室看護師の学習過程の確認し、初療室クリニカルラダーの内容を検討していくことが課題である。

P-022

一般急性期病院における認知症認定看護師による「認知症看護セミナー」の開催

広島赤十字・原爆病院 看護部

○^{かこしま まさえ}龍島 政江、山本 洋子

【目的】認知症高齢者の看護について知識を深め、効果的なケアの基礎的知識の習得ができる。

【方法】ランチャートセミナー形式で4回の講義をシリーズとして開催した。看護師を対象として自由参加とした。

【内容】認知症高齢者の疾患と症状、特徴的な行動・心理状態について。コミュニケーションの取り方、謬妄予防のための環境調整について。

【結論】参加者のべ85名 参加者の終了時アンケートより傾向をまとめた。1. 認知症の基礎的な学習の場がないため、基礎知識が不足している。2. 認知症と謬妄の症状の区別がつかない。3. どのように対応すればよいかがわからない、自信を持った対応ができない。4. 講義を聴くことで、基本的な対応の仕方、コミュニケーションの方法が学べた。

【まとめ】セミナーの効果：院内で学べる機会を設けることで、多忙な業務の中でも参加しやすく学習ができた。認知症高齢者へのケアの場面で注意すべき対応が学べ、臨床に活かせる。課題として：スタッフ全員で統一したケア体制を構築する必要がある。認知症認定看護師の活用について、認知されていない。

P-024

「看護を振り返る会」を活用した外来での取り組み

盛岡赤十字病院 看護部

○^{たかやなぎ あきこ}高柳 明子

【はじめに】自施設の外来では、2013年から固定チームナースング制をとっている。毎月1回チーム会やリーダー会を定期的に開催している。各チームの話し合いの内容は、自己の看護の振り返りや業務調整についてであり、看護を振り返る機会が殆どない状況であった。今回、看護を振り返りながら、看護観やケアについて話し合いポジティブアプローチをしながら安心して働ける組織文化をつくること目的に「看護を振り返る会」を開催した取り組みを報告する。

【方法】1. 対象:外来スタッフ 59名、2. 期間:2014年10月1日～2015年3月31日、3. 毎月「看護を振り返る会」を実施、4. 看護を振り返る会を実施した効果についてアンケート調査と個人面接の実施。

【結果】看護を振り返る会実施率は、94%であった。話し合いの内容は、1.外来患者の意志決定支援、2.セルフケア管理が困難な患者へ他職種との関わり、セルフケアへの支援を実施した、3.外来間で情報伝達をスムーズに行う方法の検討等であった。また、チーム毎の開催した様子がわかるように写真や話し合いの内容をポスターにして外来に掲示をした。他のチームの話し合いの内容や写真を見て、スタッフ間で良い刺激を受けていた。3月にアンケート調査結果(51名回収率86%)では、看護を振り返る会を行って良かったかの問いに、「とても良かった」29%、「良かった59%」、「どちらともいえない」14%であった。

【考察】看護を振り返る会は、看護を振り返ることで他者の事例を聞きながら類似体験をし、自分の看護実践に活用しようと考えてようになっていた。また、相手にポジティブアプローチをすることにより、お互いのモチベーションアップにも繋がっていたと考える。看護を振り返る会の開催により、各チームの可視化ができ、自己内省や他者の看護に触れる事で、個々に新たな看護の再発見に繋がったと考える。